

韓国社会福祉学会での国際シンポジウム報告

国際学術交流促進委員 岡田 忠克（関西大学）

韓国社会福祉学会秋季学術大会が、2017年10月27日、28日にソウル大学において開催され、日本社会福祉学会からは岩崎晋也会長、黒木保博副会長（国際学術交流促進委員会委員長）、長谷川俊雄会員、金圓景会員、岡田の5人が招待され、参加させていただくことになった。

今回の韓国社会福祉学会の大会テーマは、「韓国社会福祉-反省と変革を志す」であった。韓国社会福祉学会は、このたび創立60周年を迎えられたとのことで、韓国社会福祉学会がこれまでの成果を批判的に反省し、何をどのように変革するのかについての議論が各セッションで活発になされることを期待させるものであった。また、企画テーマ以外にも、今回の学術大会では多様な産学協力セッションや、今回、長谷川会員と岡田が報告させていただくことになった日中韓セッションなど、さまざまな企画が記念大会を盛り上げていた。日本の大会開催とは異なる点としては、関連学会である韓国児童福祉学会、韓国社会福祉実践研究学会、韓国社会福祉歴史学会、韓国社会福祉質的研究学会、韓国矯正社会福祉学会等の学会が同時に開催されているとのことで、近年、各会員の個別の研究分野の学会に参加する傾向があるなか、本体学会への参加がしやすい取り組みをされていたのは、ひとつの方法論として本学会でも参考になるものといえる。

さて、今回の大会参加には日中韓セッションへの研究報告以外にも大きな責務があった。それは長年懸案事項となっていた日中韓の学術交流に関する覚書が各国の会長により署名され発効されたことである。これにより、国際シンポジウムが2018年に日本で開催されることを皮切りに、2019年には中国、2020年には韓国と3年毎に開催されることになった。

また、個人自由研究発表では5報告が可能となり、最大報告数が、それぞれ5報告、計10報告ができることになった。今後、この学術交流が実質化していくためには、地道な相互の学術大会における個人自由研究発表をより活性化させ、水準の高いものにしていくことが求められているといえる。

日中韓セッションでは、長谷川会員からは「日本におけるひきこもり問題とソーシャルワークの課題－実践・政策・研究の展開をとおして」、岡田からは「被保護世帯の高校在学年齢者の生活実態」の研究報告を行った。セッションでは、指定討論者からの貴重なコメントや質問もあり、大変有意義なセッションとなった。ここでの書面を借りて、韓国社会福祉学会の皆様、また、現地とのやり取りをコーディネートいただいた金圓景会員に感謝申し上げる次第である。